

平成29年度 東京大学2次試験前期日程(数学問題)150分
理科(一類, 二類, 三類) 数I・II・III・A・B

1 実数 a, b に対して

$$f(\theta) = \cos 3\theta + a \cos 2\theta + b \cos \theta$$

とし, $0 < \theta < \pi$ で定義された関数

$$g(\theta) = \frac{f(\theta) - f(0)}{\cos \theta - 1}$$

を考える.

- (1) $f(\theta)$ と $g(\theta)$ を $x = \cos \theta$ の整式で表せ.
- (2) $g(\theta)$ が $0 < \theta < \pi$ の範囲で最小値0をとるための a, b についての条件を求めよ. また, 条件をみたす点 (a, b) が描く図形を座標平面上に図示せよ.

2 座標平面上で x 座標と y 座標がいずれも整数である点を格子点という. 格子点上を次の規則に従って動く点 P を考える.

- (a) 最初に, 点 P は原点 O にある.
- (b) ある時刻で点 P が格子点 (m, n) にあるとき, その1秒後の点 P の位置は, 隣接する格子点 $(m+1, n), (m, n+1), (m-1, n), (m, n-1)$ のいずれかであり, また, これらの点に移動する確率は, それぞれ $\frac{1}{4}$ である.

- (1) 点 P が, 最初から6秒後に直線 $y = x$ 上にある確率を求めよ.
- (2) 点 P が, 最初から6秒後に原点 O にある確率を求めよ.

3 複素数平面上の原点以外の点 z に対して, $w = \frac{1}{z}$ とする.

- (1) α を0でない複素数とし, 点 α と原点 O を結ぶ線分の垂直二等分線を L とする. 点 z が直線 L 上を動くとき, 点 w の軌跡は円から1点を除いたものになる. この円の中心と半径を求めよ.
- (2) 1の3乗根のうち, 虚部が正であるものを β とする. 点 β と点 β^2 を結ぶ線分上を点 z が動くときの点 w の軌跡を求め, 複素数平面上に図示せよ.

4 $p = 2 + \sqrt{5}$ とおき, 自然数 $n = 1, 2, 3, \dots$ に対して

$$a_n = p^n + \left(-\frac{1}{p}\right)^n$$

と定める. 以下の問いに答えよ. ただし設問 (1) は結論のみを書けばよい.

- (1) a_1, a_2 の値を求めよ.
- (2) $n \geq 2$ とする. 積 $a_1 a_n$ を, a_{n+1} と a_{n-1} を用いて表せ.
- (3) a_n は自然数であることを示せ.
- (4) a_{n+1} と a_n の最大公約数を求めよ.

5 k を実数とし, 座標平面上で次の2つの放物線 C, D の共通接線について考える.

$$C: y = x^2 + k$$

$$D: x = y^2 + k$$

- (1) 直線 $y = ax + b$ が共通接線であるとき, a を用いて k と b を表せ. ただし $a \neq -1$ とする.
- (2) 傾きが2の共通接線が存在するように k の値を定める. このとき, 共通接線が3本存在することを示し, それらの傾きと y 切片を求めよ.

6 点 O を原点とする座標空間内で, 一辺の長さが1の正三角形 OPQ を動かす. また, 点 $A(1, 0, 0)$ に対して, $\angle AOP$ を θ とおく. ただし $0^\circ \leq \theta \leq 180^\circ$ とする.

- (1) 点 Q が $(0, 0, 1)$ にあるとき, 点 P の x 座標がとりうる値の範囲と, θ がとりうる値の範囲を求めよ.
- (2) 点 Q が平面 $x = 0$ 上を動くとき, 辺 OP が通過しうる範囲を K とする. K の体積を求めよ.

解答例

$$\begin{aligned}
 \boxed{1} \quad (1) \quad f(\theta) &= \cos 3\theta + a \cos 2\theta + b \cos \theta \\
 &= 4 \cos^3 \theta - 3 \cos \theta + a(2 \cos^2 \theta - 1) + b \cos \theta \\
 &= 4x^3 - 3x + a(2x^2 - 1) + bx \\
 &= 4x^3 + 2ax^2 + (b-3)x - a
 \end{aligned}$$

$f(0) = 4 + 2a + (b-3) - a$ であるから

$$\begin{aligned}
 f(\theta) - f(0) &= 4(x^3 - 1) + 2a(x^2 - 1) + (b-3)(x-1) \\
 \frac{f(\theta) - f(0)}{x-1} &= 4(x^2 + x + 1) + 2a(x+1) + b-3
 \end{aligned}$$

$$\text{よって } g(\theta) = \frac{f(\theta) - f(0)}{\cos \theta - 1} = 4x^2 + 2(a+2)x + 2a + b + 1$$

(2) $x = \cos \theta$ ($0 < \theta < \pi$) より $-1 < x < 1$

$h(x) = 4x^2 + 2(a+2)x + 2a + b + 1$ ($-1 < x < 1$) とおくと

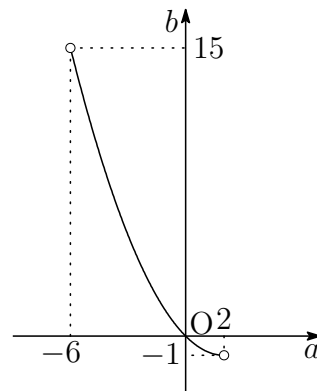
$$h(x) = 4 \left(x + \frac{a+2}{4} \right)^2 - \frac{a^2}{4} + a + b$$

$h(x)$ は $-1 < x < 1$ で最小値 0 をとるから

$$-1 < -\frac{a+2}{4} < 1, \quad -\frac{a^2}{4} + a + b = 0$$

$$\text{よって } b = \frac{1}{4}(a-2)^2 - 1 \quad (-6 < a < 2)$$

条件を満たす点 (a, b) が描く図形は、右の図のとおり。



- 2 (1) x 軸方向に 1, -1, y 軸方向に 1, -1 だけ平行移動する回数をそれぞれ i, j, k, l とすると ($0 \leq i, j, k, l \leq 6$), その確率は

$$\sum_{\substack{i+j+k+l=6 \\ 0 \leq i, j, k, l \leq 6}} \frac{6!}{i!j!k!l!} \left(\frac{1}{4}\right)^6$$

このとき $i+j+k+l=6$, $i-j=k-l$ すなわち $i+l=j+k=3$ によって, 求める確率は

$$\begin{aligned} \sum_{\substack{i+l=j+k=3 \\ 0 \leq i, j, k, l \leq 6}} \frac{6!}{i!j!k!l!} \left(\frac{1}{4}\right)^6 &= \frac{6!}{3!3!} \left(\frac{1}{4}\right)^6 \sum_{\substack{i+l=3 \\ 0 \leq i, l \leq 3}} \frac{3!}{i!l!} \sum_{\substack{j+k=3 \\ 0 \leq j, k \leq 3}} \frac{3!}{j!k!} \\ &= \frac{6!}{3!3!} \left(\frac{1}{4}\right)^6 \cdot 2^3 \cdot 2^3 = \frac{5}{16} \end{aligned}$$

- (2) $i+j+k+l=6$, $i=j$, $k=l$ すなわち $i+k=3$ によって, 求める確率は

$$\sum_{\substack{i+k=3 \\ 0 \leq i, k \leq 3}} \frac{6!}{(i!k!)^2} \left(\frac{1}{4}\right)^6 = \frac{6!}{4^6} \left\{ \frac{1}{(3!)^2} + \frac{1}{(1!2!)^2} + \frac{1}{(2!1!)^2} + \frac{1}{(3!)^2} \right\} = \frac{25}{256}$$

別解 $(1+x)^3 = {}_3C_0 + {}_3C_1x + {}_3C_2x^2 + {}_3C_3x^3$,

$$(1+x)^3 = {}_3C_3 + {}_3C_2x + {}_3C_1x^2 + {}_3C_0x^3$$

上の 2 式の積と $(1+x)^6$ の x^3 の係数 ${}_6C_3$ との比較により

$$({}_3C_0)^2 + ({}_3C_1)^2 + ({}_3C_2)^2 + ({}_3C_3)^3 = {}_6C_3$$

一般には, $(1+x)^n(1+x)^n = (1+x)^{2n}$ の x^n の係数を比較することにより

$$\sum_{k=0}^n ({}_nC_k)^2 = {}_{2n}C_n$$

したがって

$$\begin{aligned} \sum_{\substack{i+k=3 \\ 0 \leq i, k \leq 3}} \frac{6!}{(i!k!)^2} \left(\frac{1}{4}\right)^6 &= \frac{6!}{3!3!} \left(\frac{1}{4}\right)^6 \sum_{\substack{i+k=3 \\ 0 \leq i, k \leq 3}} \left(\frac{3!}{i!k!}\right)^2 \\ &= \frac{6!}{3!3!} \left(\frac{1}{4}\right)^6 \sum_{k=0}^3 ({}_3C_k)^2 \\ &= {}_6C_3 \left(\frac{1}{4}\right)^6 {}_6C_3 = ({}_6C_3)^2 \left(\frac{1}{4}\right)^6 = \frac{25}{256} \end{aligned}$$

- 3** (1) 点 $\alpha \neq 0$ と O を結ぶ線分の垂直二等分線 L の方程式は $|z| = |z - \alpha|$
 $w = \frac{1}{z}$ より, $z = \frac{1}{w}$ ($w \neq 0$) であるから

$$\left| \frac{1}{w} \right| = \left| \frac{1}{w} - \alpha \right| \quad \text{ゆえに} \quad \left| \frac{w}{\alpha} \right| \left| \frac{1}{w} \right| = \left| \frac{w}{\alpha} \right| \left| \frac{1}{w} - \alpha \right|$$

したがって $\left| w - \frac{1}{\alpha} \right| = \frac{1}{|\alpha|}$ よって, w は中心 $\frac{1}{\alpha}$, 半径 $\frac{1}{|\alpha|}$ の円

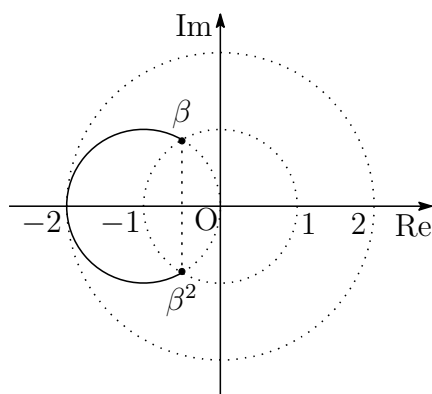
- (2) $\beta = \frac{-1 + \sqrt{3}i}{2}$, $\beta^2 = \frac{-1 - \sqrt{3}i}{2}$ であるから, 2点 β , β^2 を結ぶ線は, 点 -1 と原点 O を結ぶ線分の垂直二等分であるから, (1) の結果から

$$|w + 1| = 1 \quad \dots \textcircled{1}$$

z は, 点 β と点 β^2 を結ぶ線分上を点 z が動くから

$$\frac{1}{2} \leq |z| \leq 1 \quad \text{すなわち} \quad 1 \leq |w| \leq 2 \quad \dots \textcircled{2}$$

したがって, 点 w の軌跡は, ①, ② の共通部分で下の図の実線部分.

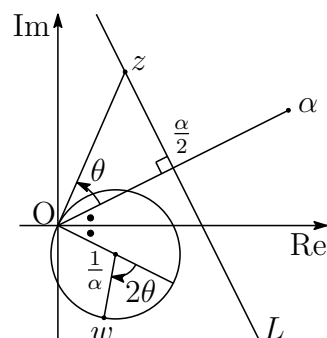


解説 L 上の点 z は

$$z = \frac{\alpha}{2} + \frac{\alpha i}{2} \tan \theta \quad \left(-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}\right)$$

$$w = \frac{1}{z} \text{ により}$$

$$\begin{aligned} w &= \frac{2}{\alpha} \cdot \frac{1}{1 + i \tan \theta} = \frac{1}{\alpha} \cdot \frac{2 \cos \theta}{\cos \theta + i \sin \theta} \\ &= \frac{1}{\alpha} (2 \cos^2 \theta - 2i \sin \theta \cos \theta) \\ &= \frac{1}{\alpha} (1 + \cos 2\theta - i \sin 2\theta) \end{aligned}$$



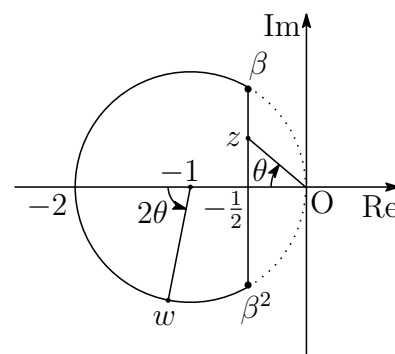
点 w は点 $\frac{1}{\alpha}$ を中心とし、半径 $\frac{1}{|\alpha|}$ の円周上にある。 $-\pi < 2\theta < \pi$ であるから、点 w の表す軌跡はこの円から原点 O を除いたものになる。

また、点 β と β^2 を結ぶ線分上の点 z は

$$z = -\frac{1}{2} + \frac{i}{2} \tan \theta \quad \left(-\frac{\pi}{3} \leq \theta \leq \frac{\pi}{3}\right)$$

$$w = \frac{1}{z} \text{ により}$$

$$\begin{aligned} w &= -\frac{2}{1 - i \tan \theta} = -\frac{2 \cos \theta}{\cos \theta - i \sin \theta} \\ &= -2(\cos^2 \theta + i \sin \theta \cos \theta) \\ &= -1 - (\cos 2\theta + i \sin 2\theta) \end{aligned}$$



$$\boxed{4} \quad (1) \quad a_1 = p - \frac{1}{p} = 2 + \sqrt{5} - \frac{1}{2 + \sqrt{5}} = 2 + \sqrt{5} - (\sqrt{5} - 2) = 4$$

$$a_2 = p^2 + \frac{1}{p^2} = \left(p - \frac{1}{p}\right)^2 + 2 = 4^2 + 2 = 18$$

$$(2) \quad p^{n+1} + \left(-\frac{1}{p}\right)^{n+1} = \left(p - \frac{1}{p}\right) \left\{ p^n + \left(-\frac{1}{p}\right)^n \right\} + p^{n-1} + \left(-\frac{1}{p}\right)^{n-1} \text{ より}$$

$$a_{n+1} = a_1 a_n + a_{n-1} \quad \text{よって} \quad a_1 a_n = a_{n+1} - a_{n-1}$$

補足 $\alpha^{n+1} + \beta^{n+1} = (\alpha + \beta)(\alpha^n + \beta^n) - \alpha\beta(\alpha^{n-1} + \beta^{n-1})$

(3) (1), (2) の結果から $a_1 = 4, a_2 = 18, a_{n+1} = 4a_n + a_{n-1} \cdots (*)$
よって, すべての自然数 n について, a_n は自然数である.

(4) 2つの自然数 k, l の最大公約数を $\gcd(k, l)$ とする.

(*) にユークリッドの互除法を順次適用することにより

$$\gcd(a_{n+1}, a_n) = \gcd(a_n, a_{n-1}) = \cdots = \gcd(a_2, a_1) = 2$$

ユークリッドの互除法

n が m で割り切れること (m が n の約数) を $m | n$ と表記し, 整数 x, y の最大公約数を (x, y) と表記すると, 次は自明である.

$$(x, y) | x, \quad (x, y) | y$$

ユークリッドの互除法

2 整数 a, b について ($a > b > 0$), a を b で割ったときの商を q , 余りを c とすると

$$c \neq 0 \text{ のとき} \quad (a, b) = (b, c)$$

$$c = 0 \text{ のとき} \quad (a, b) = b$$

証明 $c \neq 0$ のとき, $a = bq + c$ より $(b, c) | a$ また, $(b, c) | b$ であるから, (b, c) は a と b の公約数, したがって

$$(b, c) | (a, b) \quad \cdots \textcircled{1}$$

同様に, $c = a - bq$ より $(a, b) | c$ また, $(a, b) | b$ であるから, (a, b) は b と c の公約数, したがって

$$(a, b) | (b, c) \quad \cdots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ より} \quad (a, b) = (b, c)$$

$c = 0$ のとき, 自明.

証終

5 (1) $y = x^2 + k$ と $y = ax + b$ から y を消去すると

$$x^2 + k = ax + b \quad \text{ゆえに} \quad x^2 - ax + k - b = 0$$

このとき、方程式の係数について

$$(-a)^2 - 4(k - b) = 0 \quad \text{すなわち} \quad 4k = a^2 + 4b \quad \dots \textcircled{1}$$

$x = y^2 + k$ と $y = ax + b$, すなわち, $x = \frac{1}{a}y - \frac{b}{a}$ について, ① より

$$4k = \left(\frac{1}{a}\right)^2 + 4\left(-\frac{b}{a}\right) = \frac{1}{a^2} - \frac{4b}{a} \quad \dots \textcircled{2}$$

①, ② から k を消去すると

$$\begin{aligned} a^2 - \frac{1}{a^2} + 4b\left(1 + \frac{1}{a}\right) &= 0 \\ (a+1)(a-1)(a^2+1) + 4ab(a+1) &= 0 \end{aligned}$$

$a \neq -1$ より, $a+1 \neq 0$ であるから

$$(a-1)(a^2+1) + 4ab = 0 \quad \text{よって} \quad b = \frac{(1-a)(1+a^2)}{4a} \quad \dots \textcircled{3}$$

これを ① に代入して

$$4k = a^2 + 4 \cdot \frac{(1-a)(1+a^2)}{4a} \quad \text{よって} \quad k = \frac{a^2 - a + 1}{4a} \quad \dots \textcircled{4}$$

(2) $a = 2$ を ④ に代入すると $k = \frac{3}{8}$ これを ①, ② に代入すると

$$\frac{3}{2} = a^2 + 4b, \quad \frac{3}{2} = \frac{1}{a^2} - \frac{4b}{a}$$

上の 2 式から b を消去して整理すると

$$(a+1)(a-2)(2a-1) = 0 \quad \text{これを解いて} \quad a = -1, 2, \frac{1}{2}$$

$k = \frac{3}{8}$ を ① に代入すると

$$\frac{3}{2} = a^2 + 4b \quad \text{ゆえに} \quad b = -\frac{a^2}{4} + \frac{3}{8}$$

よって $(a, b) = \left(-1, \frac{1}{8}\right), \left(2, -\frac{5}{8}\right), \left(\frac{1}{2}, \frac{5}{16}\right)$

別解 ③, ④に $a = 2$ を代入すると $b = -\frac{5}{8}$, $k = \frac{3}{8}$

このとき, C, D の共通接線の1本は $y = 2x - \frac{5}{8}$

C と D は直線 $y = x$ に関して対称であるから, 上の共通接線と直線 $y = x$ に関して対称な直線

$$x = 2y - \frac{5}{8} \quad \text{すなわち} \quad y = \frac{1}{2}x + \frac{5}{16}$$

も C と D の共通接線である.

また, 直線 $y = x$ に関して対称な直線 $x + y = d$ が $C: y = x^2 + \frac{3}{8}$ と接するとき, 2式から y を消去して整理すると

$$x^2 + x + \frac{3}{8} - d = 0$$

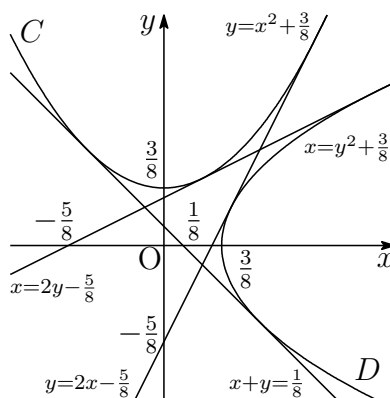
このとき, 係数について

$$1^2 - 4 \cdot 1 \left(\frac{3}{8} - d \right) = 0 \quad \text{これを解いて} \quad d = \frac{1}{8}$$

直線 $y = x$ に関する C と D の対称性により, 直線

$$x + y = \frac{1}{8} \quad \text{すなわち} \quad y = -x + \frac{1}{8}$$

は, C と D の共通接線である.

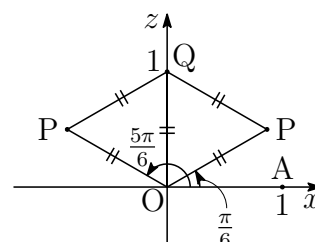


よって, 求める3本の共通接線は

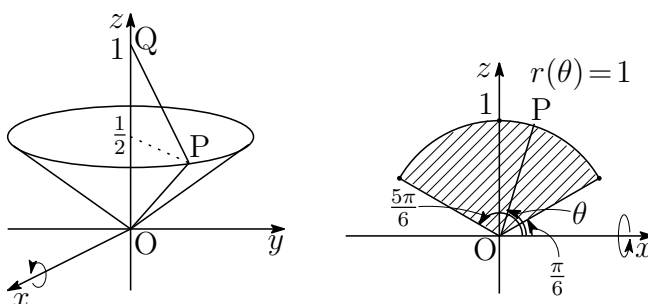
$$y = 2x - \frac{5}{8}, \quad y = \frac{1}{2}x + \frac{5}{16}, \quad y = -x + \frac{1}{8}$$

- 6 (1) θ が最大または最小となるのは, zx 平面上において, P が右の図で示した位置にあるときである. $x = \cos \theta$ であるから

$$\frac{\pi}{6} \leq \theta \leq \frac{5\pi}{6}, \quad -\frac{\sqrt{3}}{2} \leq x \leq \frac{\sqrt{3}}{2}$$



- (2) 点 Q が平面 $x = 0$ 上の点 $(0, 0, 1)$ にあるとき, 辺 OP は左図の円錐面を描く. 点 Q を平面 $x = 0$ を動かす, すなわち, OQ を平面 $x = 0$ 上で O を中心に回転させると, この円錐面が zx 平面を通過してできる zx 平面に描く輪郭は右図の斜線部分になる.



極方程式による曲線の回転体の体積

極方程式 $r = r(\theta)$ ($\alpha \leq \theta \leq \beta$) で表される曲線を x 軸の回りに回転させた立体の体積 V は

$$V = \frac{2\pi}{3} \int_{\alpha}^{\beta} \{r(\theta)\}^3 \sin \theta d\theta$$

したがって, (上の公式¹に $r(\theta) = 1$, $\alpha = \frac{\pi}{6}$, $\beta = \frac{5\pi}{6}$ を代入すると)

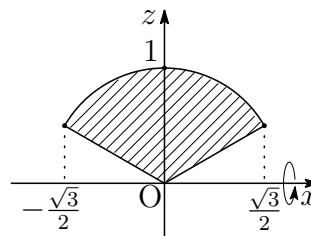
$$V = \frac{2\pi}{3} \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} 1^3 \sin \theta d\theta = \frac{2\pi}{3} \left[-\cos \theta \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} = \frac{2\sqrt{3}}{3} \pi$$

別解 2012年九大理系 p.7 の例5で示した公式²

$$V_2 = \frac{4}{3} \pi r^2 a$$

に $r = 1$, $a = \frac{\sqrt{3}}{2}$ を代入すると

$$V = \frac{4}{3} \pi \cdot 1^2 \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} = \frac{2\sqrt{3}}{3} \pi$$



¹http://kumamoto.s12.xrea.com/N/KBdai/KBdai_ri_2016.pdf [5] 参照

²http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai_ri_2012.pdf

2009 京都大学 (理系) 前期

xy 平面上で原点を極, x 軸の正の部分を出線とする極座標に関して, 極方程式 $r = 2 + \cos \theta$ ($0 \leq \theta \leq \pi$) により表される曲線を C とする. C と x 軸とで囲まれた図形を x 軸のまわりに 1 回転して得られる立体の体積を求めよ.

$$\text{解答 } V = \frac{2\pi}{3} \int_0^\pi (2 + \cos \theta)^3 \sin \theta d\theta = \frac{2\pi}{3} \left[-\frac{1}{4}(2 + \cos \theta)^4 \right]_0^\pi = \frac{40}{3}\pi$$

2013 大阪大学 (理系) 前期

xyz 空間内の 3 点 $O(0, 0, 0)$, $A(1, 0, 0)$, $B(1, 1, 0)$ を頂点とする三角形 OAB を x 軸のまわりに 1 回転させてできる円すいを V とする. 円すい V を y 軸のまわりに 1 回転させてできる立体の体積を求めよ.

解答 右の図の斜線部分を y 軸のまわりに 1 回転させた立体の体積であるから

$$V = \frac{4}{3}\pi(\sqrt{2})^2 \cdot 1 = \frac{8}{3}\pi$$

